「会員短信 34」

「銭湯の思い出」鈴鹿洋子

　子どもの頃の思い出に銭湯がある。銭湯へ行くのはいつも大抵、夕食を済ませてからの七時、八時であった。最も混雑する時間で、いつもごった返していた。
おかみさんたちの話し声や湯をかける音、子どもたちのはしゃぐ声にエコーも効いて、とても賑やかだった。加えて男湯と女湯を仕切る壁も天井より低かったので、男湯の声も聞こえてくる。壁越しに石鹸が放り込まれたり、小さな子どもは仕切りの壁に設けられているドアから男湯と女湯を行ったり来たり。湯船に浸からなくてものぼせそうだった。
しかし、たまに湯が沸く開店早々の三時とか四時に行くと、夜とは打って変わって静かな時間が流れていた。私の住む町は、古くから漆器の町として栄えていたのだが、この時間帯には漆器屋のご隠居さんたちが多かった。話し声もゆっくりと静かだった。そして、湯から上がる時には必ず「それではどなた様もごゆっくり。ごきげんよう」と一言挨拶をしてゆかれた。みなさんそうだった。
その後、時代は変わり家庭風呂が普及し始め、四軒あった銭湯は全て廃業となった。当時のご隠居さんたちも既にいない。
でも、思うのである。あのご隠居さんたちが、あちらに旅立たれる時は、きっとあの一言を残されたに違いないと。
「それではどなた様もごゆっくり。ごきげんよう」

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。